

企画背景

世界の教育の潮流

OECD (DeSeCo プロジェクト) や ACT21s (21 世紀型スキル) では、変化の激しいこれからの社会を生きるために必要な能力やスキルとして、他者と協力しながら問題解決していく力が重視されており、その要素として自律性や新しい物事の考え方を創造し、表現する力などが求められている。

PISA の調査結果にみられる日本の子どものたちの学習課題

全体的に日本の子どもの学力は世界の高いレベルに位置しているが、学習意欲の低さが問題視されている。

次期学習指導要領の検討

次期学習指導要領では、これからの社会変化を見据えて身につけるべき能力や資質、また主体的に学ぶことを重視する方向性で内容の検討がなされている。(2014 年時点)

21 世紀を生きていく上で土台となる「主体的に学ぶ力」をどう伸ばしていくか？



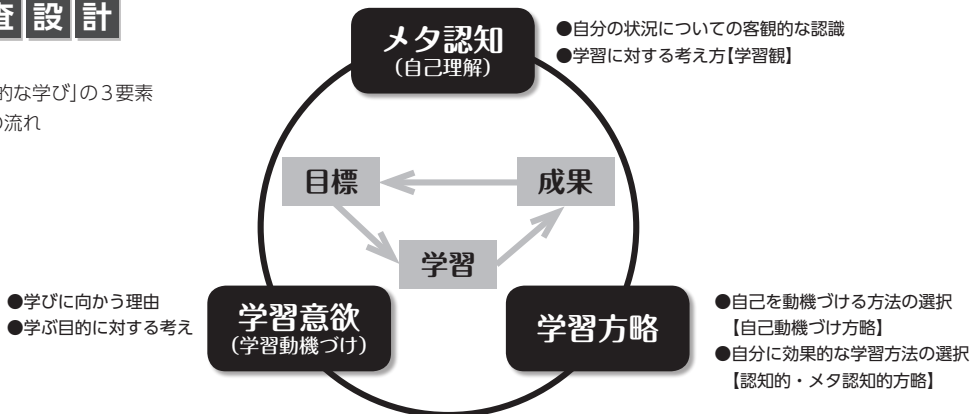
【本調査の目的】子どもたちが「主体的に学ぶ力」を身につけるための

- ・ 学年ごとの学習動機づけのあり方
- ・ 学年ごとに用いる学習方略と身につけ方
- ・ 子どもの学習意欲の向上や学習方略の獲得に影響する保護者の関わり

などを明らかにする。

調査設計

- 「主体的な学び」の 3 要素
- 学習の流れ



「主体的な学び」の学習モデル

教育心理学研究の「自己調整学習」理論では、自ら目標を設定し、学習を主体的に進め、成果につなげるために、「主体的な学び」の 3 要素「メタ認知」「学習意欲」「学習方略」が重要だとされています。

本調査では、「主体的に学ぶ力」を伸ばす上で、それぞれの要素がどう影響しているか、また各要素の間にどのような関連があるかを把握することができるよう調査項目を設定しています。

* 「自己調整学習」理論を参考に「主体的な学び」の学習モデルを作成。

調査概要

1 調査テーマ

小中学生の学びや保護者の関わりについての意識と実態

2 調査方法

郵送法(自記式アンケートを郵送により配布・回収)

3 調査時期

2014年2月～3月

4 調査地域・対象・サンプル構成

●調査地域・対象：全国の小学4年生～中学2年生の子どもとその保護者

●発送数・有効回収数・有効回収率

		発送数(組)	有効回収数(組)	有効回収率				
小学4年生	モニター	1,132	1,040	91.9%	小学生の有効回収数 3,450組			
	非モニター	868	177	20.4%				
	合計	2,000	1,217					
小学5年生	モニター	1,060	969	91.4%		中学生の有効回収数 1,959組		
	非モニター	940	215	22.9%				
	合計	2,000	1,184					
小学6年生	モニター	907	838	92.4%			中学生の有効回収数 1,959組	
	非モニター	1,093	211	19.3%				
	合計	2,000	1,049					
中学1年生	モニター	850	714	84.0%				中学生の有効回収数 1,959組
	非モニター	1,150	219	19.0%				
	合計	2,000	933					
中学2年生	モニター	873	791	90.6%	中学生の有効回収数 1,959組			
	非モニター	1,127	235	20.9%				
	合計	2,000	1,026					

注1) 表内の「モニター」は東京大学 社会科学研究所とベネッセ教育総合研究所の共同研究「子どもの生活と学び」研究プロジェクトの調査モニターを示す。

注2) 「非モニター」はサンプルを確保するために「モニター」とは別に全国の小学4年生～中学2年生のリストから無作為に抽出し、協力を依頼した親子を示す。

注3) 「有効回収数」は、回収した調査票のうち、学年が不明な票、子ども票または保護者票のどちらかしか回収できていない票を除いた数である。

5 調査項目

子ども調査の主な項目

勉強の好き嫌い／好きな教科／学校で受けている授業方法／得意なこと／学校での学習態度や家庭での学習習慣／家庭での勉強時間／成績の自己評価(中学生のみ)／勉強方法／勉強方法を教えてくれた人／勉強する理由／自己認識／学習に対する考え／学習上の悩み／子どもから見た父親・母親の関わり／社会観や価値観／進学希望など

保護者調査の主な項目

子どもの生活や学習習慣に対する評価／基本的な養育態度／子どもの勉強への関わり／1ヶ月の教育費／子どもと一緒にすること／子どもの成績への評価(小学生のみ)／子どもに身につけてほしい力／子どもとの会話／子どもの学習に関する悩みや気がり／社会観や価値観／学習に対する自身の考え／子どもの生活や勉強への満足度など

■本報告書を読む際の注意点

- ①本文中、「小学生」は小学4～6年生の全体を、「中学生」は中学1～2年生の全体を示す。
- ②図表において、小学4～6年生、中学1～2年生の有効回収数すべてを集計している場合は、サンプル数は表示しない(P.4「基本属性」を除く)。
- ③図表で使用している百分率(%)は、小数点第2位を四捨五入して算出している。四捨五入の結果、数値の和が100.0にならない場合がある。

調査特徴

本調査は、2014年2月～3月に、全国の小学4年生～中学2年生の子どもとその保護者を対象に、子どもたちの学びの実態や、保護者のかかわりに関する実態と意識などを明らかにしたものである。本調査の主な特徴は、以下の4点にまとめられる。

1 教育心理学の「自己調整学習」理論を参考にした調査設計であること

子どもが「主体的に学ぶ力」を身につけるため、「メタ認知」「学習意欲(学習動機づけ)」「学習方略」は重要な3要素である。子どもの学びへの影響、この3要素の間の関連、保護者のかかわりが3要素の形成に対する影響を明らかにできるように調査設計を行っている。

2 親子カップリング調査であること

本調査は子どもだけではなく、保護者も対象にしており、保護者のかかわりが子どもの「主体的に学ぶ力」の形成にどのような影響を及ぼしているのかを明らかにできる。

3 学校段階を横断した調査であること

本調査は小学4年生から中学2年生を対象にしており、その間の子どもの発達による違いや、小学6年生から中学1年生という学校段階移行期において、子どもの学びや保護者のかかわりの変化をとらえることができる。

4 今後、追跡調査が可能であること

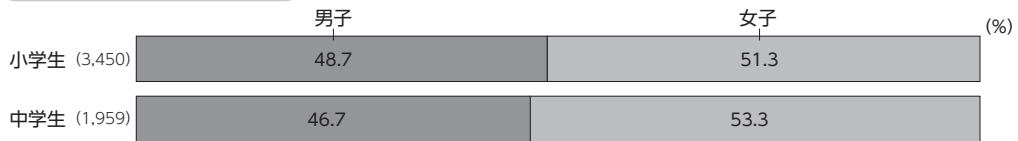
本調査は継続モニターに調査を依頼しているため、対象である子どもと保護者に対し、その後の変化や変化のプロセスを追跡で捉えることができる。

基本属性

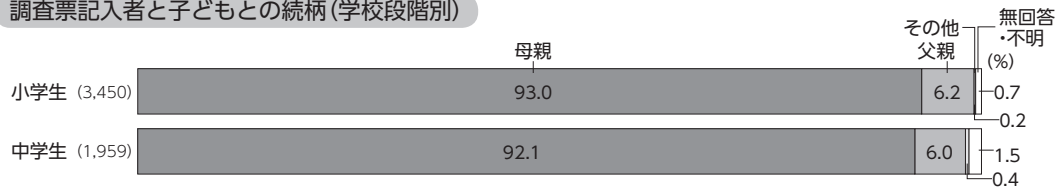
子どもの学年



子どもの性別 (学校段階別)

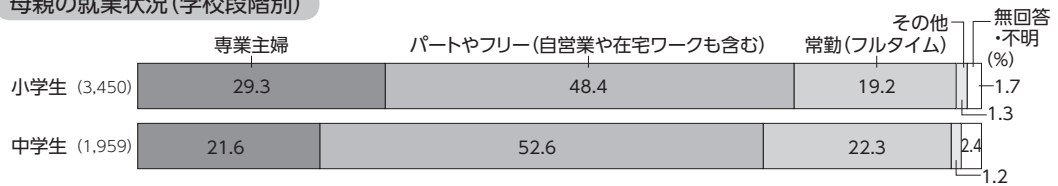


調査票記入者と子どもとの続柄 (学校段階別)

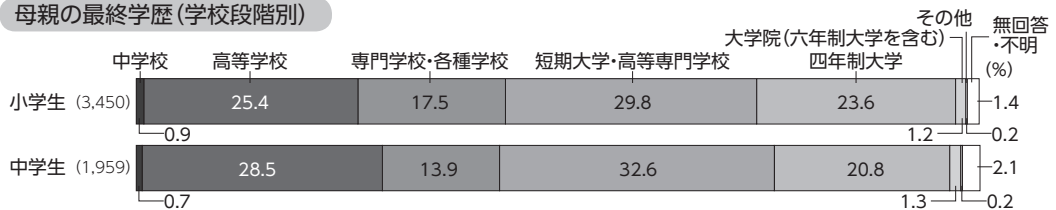


注) 「その他」は調査票上の「祖母」+「祖父」+「その他」。

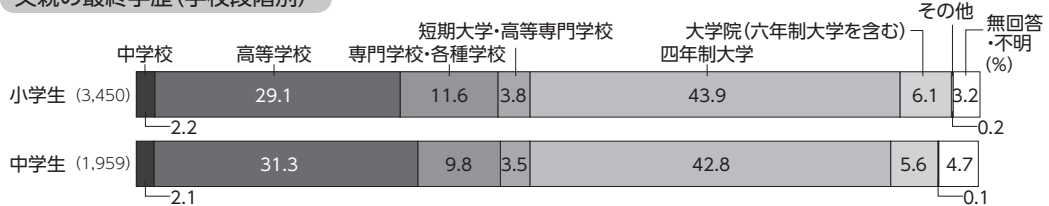
母親の就業状況 (学校段階別)



母親の最終学歴 (学校段階別)



父親の最終学歴 (学校段階別)



父親と母親の平均年齢 (学校段階別)

(単位：歳)

	小学生	中学生
父親	43.3	45.9
母親	41.3	43.9